



TITLE:

歯頸部結紮による実験的歯槽膿漏症の発症過程と抜歯後治癒経過について (Abstract\_要旨)

AUTHOR(S):

横田, 實

---

CITATION:

横田, 實. 歯頸部結紮による実験的歯槽膿漏症の発症過程と抜歯後治癒経過について. 京都大学, 1968, 医学博士

ISSUE DATE:

1968-07-23

URL:

<http://hdl.handle.net/2433/212888>

RIGHT:

氏 名	横 田 實 よこ た みのる
学 位 の 種 類	医 学 博 士
学 位 記 番 号	医 博 第 358 号
学位授与の日付	昭 和 43 年 7 月 23 日
学位授与の要件	学 位 規 則 第 5 条 第 1 項 該 当
研 究 科 ・ 専 攻	医 学 研 究 科 外 科 系 専 攻
学 位 論 文 題 目	齒頸部結紮による実験的齒槽膿漏症の発症過程と抜歯後治癒経過について

論文調査委員 (主 査) 教授 美濃口 玄 教授 岡本耕造 教授 翠川 修

### 論 文 内 容 の 要 旨

正常歯牙抜歯創の治癒経過に関しては、数多くの報告があるが、通常臨床上抜歯の対象となる根尖病巣、辺縁性歯周組織疾患等病的歯牙の抜歯創の治癒過程に関する研究はあまり多くはない。就中膿漏歯牙は抜歯前に歯槽骨の消失が著明であって、抜歯後の補綴装置作製の困難な場合が多い。従って、膿漏歯牙抜歯後歯槽骨の治癒経過は、創傷治癒の立場からばかりでなく、補綴学的にも興味ある問題である。そこで成犬を用い、実験的に発症した膿漏歯牙の抜歯後治癒過程と歯槽堤の形態的变化を検討した。

#### 実験方法

健康な成犬の下顎小臼歯の歯頸部に絹糸を結紮して実験的に歯槽膿漏症を発症し、その抜歯後の治癒過程を観察すると共に、抜歯前後を通じて歯槽骨上縁の高さの変化を計測した。

#### 実験結果

##### 実験Ⅰ 絹糸結紮期間の長短による抜歯創治癒過程の差異について

健康な成犬26頭を用い、絹糸による歯頸部の結紮期間を4, 8, 12, 20週の4群と対照に分け、抜歯後60日迄の治癒過程を観察した。

抜歯前所見：結紮後4, 8週では歯肉に急性炎症症状を呈し、歯槽骨が急激に消失し、12週を境に症状は慢性化し、所謂歯槽膿漏症様の症状を示し、歯槽骨消失の速度も緩かになる。

抜歯後所見：結紮4週では対照とその治癒経過と大差は見られないが、結紮期間が長期になる程治癒は遅延し、炎症の波及も著しい。結紮12, 20週では、歯槽骨上縁の吸収像の上に失われた歯槽骨を恢復するように新生骨が増殖し、抜歯窩口中央部で凹み辺縁に盛り上る特異な形態を示す。計測結果では、対照は抜歯後20日より次第に歯槽骨上縁の高さを減じ、結紮4, 8週は対照に類似の吸収傾向が見られるが、吸収量は若干少ない。12, 20週は、抜歯後60日程度では歯槽骨上縁の高さに殆んど変動はない。

##### 実験Ⅱ 絹糸結紮12週後の抜歯創治癒過程についての長期観察

健康な成犬19頭を用い、実験Ⅰで結紮12週頃より所謂歯槽膿漏症様の所見を呈するところから、結紮期

間を12週に一定し、340日迄の治癒経過を観察した。

抜歯前所見：実験Ⅰの結紮12週同様、歯肉嚢より排膿、歯牙動揺等所謂歯槽膿漏症様所見が顕著である。

抜歯後所見：上皮の構造の正常化、抜歯窩上方部の新生骨梁の緻密化は対照より幾分遅延するが、長期的な観点からは対照と治癒機序に本質的な差異はない。特異な所見として、歯槽骨上縁部の骨新生が対照よりも著明であり、抜歯窩口よりも新生骨梁が盛り上って増殖している。計測的には、抜歯後150日迄歯槽骨上縁の高さに殆んど変化なく、以後僅かに吸収するが、対照は150日迄次第に吸収を増し、以後著明な変化がない、抜歯後の吸収は対照の方がかなり大きい、膿漏歯牙の場合は抜歯前の吸収が多く、抜歯前、後の吸収を加えると、対照の吸収量をかなり凌駕する。

以上の如く、膿漏歯牙抜歯後初期には若干治癒が遅延するが、最終的には正常歯牙抜歯創と同様の経過をたどり、治癒機序に本質的な差異はなく、長期的な観点からは病変の影響の痕跡を残さないように思われる。結紮期間が長期の場合、抜歯前に失われた歯槽骨を恢復するかのように、歯槽骨上縁部に骨新生増殖が見られ、この程度の結紮期間では歯槽骨に旺盛な恢復力があると考えられる。

### 論文審査の結果の要旨

いわゆる歯槽膿漏歯牙は、抜歯前に歯槽骨の消失が著明であり、抜歯後の補綴装置作製の困難な場合が多い。したがって膿漏歯牙抜歯後の歯槽骨治癒経過は、創傷治癒の立場からばかりでなく、義歯装置のための補綴学的立場からも究明されねばならない。横田は成犬を用い、歯頸部絹糸結紮法により、実験的に発症した膿漏歯牙の抜歯後治癒過程とその間の歯槽堤の形態的变化を検討した。すなわち歯頸部結紮期間を4, 8, 12, 20週と対照に分け、抜歯後60日までの治癒経過を観察した。結紮4, 8週では歯肉に急性炎症症状を呈し、歯槽骨の消失が急激であるが、12週以後は症状も慢性化し、歯槽骨の消失速度も緩かである。抜歯後は、結紮期間の長期の場合程、治癒は遅延する。結紮12, 20週では歯槽骨上縁の吸収像の上に新生骨が増殖し、抜歯窩口で凹み辺縁に盛り上がる特異な形態を示す。次に結紮期間を12週に一定し、抜歯後340日まで治癒経過を観察したが、この場合特異な点は、歯槽骨上縁の骨新生が対照より著明に見られることであった。

以上から結紮期間が長期の場合、歯槽骨上縁部に骨新生増殖が見られ、この程度の結紮期間では歯槽骨におうせいな回復力があることを認めた。

本論文は学術上有益であって医学博士の学位論文として価値あるものと認定する。